

# 出島復元の一翼を担う 若手技術者

文化財保存計画協会  
技術員

武田 学



たけだまなぶ  
岡山県倉敷市出身。長崎大学  
環境科学部第一期生として  
入学。平成15年に卒業後、翌  
月から大工・池上算規氏による  
渡り腰工法、竹小舞下地の  
土壁による家づくりを学ぶ。二  
級建築士免許取得。平成23  
年に大工として独立し「武田  
李工務店」を立ち上げる。平  
成26年、文化財保存計画協会  
では技術員として史跡「和  
蘭商館跡」第3期建造物復元  
主体工事の設計管理に従事。

百年後のために植える杉  
日本古来の文化にふれる

今年注目されることの一つに、  
出島の第Ⅲ期復元の完成が挙げら  
れます。現在、筆者蘭人部屋や銅  
蔵など六つの建物の復元が進んで  
おり、その現場で文化財保存計画  
協会の技術員として働いているの  
が、長崎大学O.B.、武田学さんです。

「私の役割は、発注元である行政  
と現場との橋渡しをしながら、設  
計図通りに工事が進捗するように  
監理することです。また、建物を  
実際に建てていく過程のなかで、  
設計図のスケールでは表現できな  
い部分に問題が生じた場合は、現  
場の技術者と協議しながら解決し  
ていきます」。

出島ならではの苦労もあります。  
復元工事は単に外観を復元すれば  
いいというものではありません。  
伝統的な接合で成立する構造体と、  
竹、繩、土で構成される土壁など、  
江戸時代の工法も再現しつつ、公  
共施設としての構造補強を行って  
耐震性も確保するのです。

「現代的な構造力学の考え方と、  
復元建物の本質を損なわない考え方  
とを調整するのも大事な仕事の  
一つです。現場では釘の間隔や下  
地の入れ方、穴を開ける位置など、  
細かい指示が必要になってきます。  
そのほか、屋根の軒をささえる部  
材である「持ち送り」のデザイン  
にも関わりました。長崎や平戸に  
残る同時期の日本家屋を参考にし  
つつ、建物の役割や時代考証を確  
認し、専門家の意見を仰ぎながら

のプロセスです。棟梁の元では現  
場で技術を磨く作業でしたが、  
人々の知恵の集積のなかで作り上  
げる文化財工事に別の魅力を感じ  
ています」。

ところで、武田さん、工学部出  
身かと思いきや、実は環境科学部  
の一期生。卒業後、大工の棟梁の  
元で八年間修業の末に独立したと  
いう経歴の持ち主です。

「高校のころから環境問題に関心  
があり、長崎大学の資料で新しく  
環境科学部が出来たことを知り、  
文理融合という理念にも魅かれて  
入りました」。理系で入り、途中  
から文系へ。そして環境倫理や哲  
学の世界へ導かれていきます。

「倫理学が専門の吉田雅章先生に  
師事しました。人が生きていくな  
ど自然と関わっていく形態こそ  
が文化。里山文化に象徴されるよ  
うな、永く循環的な自然の利用を  
行ってきた日本の文化をなおざり  
にしては、環境問題の解決は成り  
立たないと学びました。その後、  
一年間休学して熊野で農業修業を  
したんですね。築百年の民家で暮  
らし、裏山には樹齢百年の太い杉  
がありました。その木が百年後の  
民家の改修工事に使うために植え  
られたことを知り、日本古来の考  
え方にふれて感動しました。先生  
が言っていたのはこのことかと」。

そのころ、友人を訪ねてカンボ  
ジアに行った武田さん。現地の  
人々が田んぼや畑を耕し、自力で  
家を建てるのを見て「先進国から  
何もできない若造がやって来て、  
何が途上国支援だ?」と深く恥じ、  
自分が誇れる技術を身につけなけ  
ど感じて飛び込みました」。

「その後、築明治四年の長崎市内  
の土蔵の修復を依頼されました。  
あつて、あえて難しい素材を手元  
に入りを許されます。工場で加工さ  
れた材木を使うのが主流の業界に  
あって、あえて難しい素材を手元  
で切り込む「手刻みによる工法」  
の第一人者です。ここで八年間修  
業し、二〇一一年に独立しました。

「その後、築明治四年の長崎市内  
の土蔵の修復を依頼されました。  
がわからず、多くの業者さんは手  
を出しません。土壁の厚みが三十  
センチ近くもあり乾燥にも時間が  
かかります。結局、一年以上携わ  
りましたが、非常に勉強になりました

れば国際貢献もできないと自覚。  
そのためには大工の修業が必要だ  
と一念発起。大学卒業後、伝統的  
な工法や竹小舞の土壁の家づくり  
を得意とする池上算規さんに弟子  
入りを許されます。工場で加工さ  
れた材木を使うのが主流の業界に  
あって、あえて難しい素材を手元  
で切り込む「手刻みによる工法」  
の第一人者です。ここで八年間修  
業し、二〇一一年に独立しました。

「その後、築明治四年の長崎市内  
の土蔵の修復を依頼されました。  
がわからず、多くの業者さんは手  
を出しません。土壁の厚みが三十  
センチ近くもあり乾燥にも時間が  
かかります。結局、一年以上携わ  
りましたが、非常に勉強になりました



## 復元工事の一般公開は 後継者育成の目的も

今回の第Ⅲ期復元計画では頻  
に見学会を行い、復元過程を市民  
に公開しています。これは、第Ⅳ  
期を見越した次世代の技術者育成  
を視野に入れているといいます。

「今、この世界の技術者の多くは  
六十代や七十代。ここ十年で失わ  
れてしまふ技術もあるかもしれません  
。実際、墨付けや手刻みにこ  
のくらいのこだわりは必然でしょ  
う。これが成功例とは言いません  
が、大学時代は人生のなかでも特  
別な出会いのある贊沢な時間です。  
大学の外にも飛び出して大学生で  
あることを客観視する時間を持つ  
方がいい。すると、勉強の意味  
がわかつてきます」。

環境科学を切り口に、日本古來  
の暮らし方の探求から建築界に  
入った武田さん。世界に開かれた  
出島の復元に携わることで、自身  
の世界も広げようとしています。